平成 27 年度大学院派遣研修報告書

派遣者番号	26Ｓ01	氏　名	高橋　勝也
研究主題 ―副主題―	中等教育段階におけるシミュレーションを活用した 公民科授業の実践開発		
所属校	都立桜修館中等教育学校	派遣先	鳴門教育大学大学院

項　目	内　容
Ⅰ　研究の目的	東京都教育委員会は平成 17 年度より段階的に中高一貫教育校を 10 校（千代田区九段中等教育学校を含めると 11 校）設置した。そのほとんどの東京都立中高一貫教育校では、公民科（政治・経済、現代社会）担当教員は、教科の特性上、単数一人配置になっている。そのため、六年間の公民科教育（中学校社会科公民的分野、高等学校公民科政治・経済、現代社会）を同一人物の教員が担当することになり、学習支援が重複してしまったり、ワンパターン化した知識注入が施されたりする懸念が生じている。 本研究では多くの子供たちが興味・関心を高く示すシミュレーションを活用し、これをヒントに教材開発を展開しようとするものである。様々な学問でも活用されているシミュレーションは、人間社会の変化を読み解くのに有効な教育方法であり、新しい社会科学の形成を助けるものになると考えている。知識の習得・活用はもちろんのこと、現代社会の諸課題に向かい合い、挑み続ける子供たちの育成に寄与する授業開発に取り組む。
Ⅱ　研究の方法	１　研究仮説の設定 －シミュレーションの活用が、子供たちの関心・意欲を高め、 社会認識形成をスムーズにするのではないか－ ⑴ 現代社会の子供たちは、社会が複雑化しているゆえ、社会的な問題を分析しようとしても難しさを感じてしまう傾向がある。 ⑵ 黒板上であっても、コンピュータ上であっても、単純化したモデルを提示することができれば、生徒たちのイメージ力をアップできる。 ⑶ 模擬的な活動を繰り返すことで論理的な思考力を培い、社会に貢献するアイデアを自ら生み出しやすくなり、前向きで意欲的な子供たちを育成できる。 以上の実態より、シミュレーションには大いなる可能性が秘めていると考えている。 ２　授業構成理論の確立 －「知のモデル化」がもたらす社会認識形成－ シミュレーションを反映した教材が、どのように子供たちの社会認識形成に結びつくかを明らかにするため、「知のモデル化」という理論を展開し、研究成果に結び付けることにする。「知のモデル化」とは、一言で言えば、子供の経験や既得知識を社会認識に結び付けることである。 子供たちは誰でも、日常生活において様々な経験を積んでいる。そのような中、公民科教育では地域社会でのごみ処理施設建設問題から地球規模での地球環境問題まで、あらゆる現代社会の諸課題を考察させなければならない。このとき、複雑化した現代社会の諸課題に難しさを感じてしまえば、子供たちを公民科・社会科嫌いにしてしまっているのかもしれない。しかし、単純化したシミュレーションによって、子供たちの何気ない日常生活での経験（例えば、人

	間集団には対立が起きてしまうこと、人間は協力した方がより良い生活ができることなど）だけで、現代社会の諸課題を考察できれば画期的である。開発する教材化シミュレーションは、子供たちの現代社会を鋭く捉える社会認識を形成させるようとするものである。全ての高校生が、自らの経験だけ得られる「知」を単純化したシミュレーション教材によって喚起して、あらゆる現代社会の諸課題を考察できるようにしようとするものが、「知のモデル化」である。
Ⅲ　研究の結果	本研究の結果は、シミュレーションを活用して、「知のモデル化」によって、子供たちが得る社会認識形成を検証したことにある。 １　開発した授業実践 シミュレーションの世界を二つのだけの農村（Ａ村、Ｂ村）に設定し、農業だけで生活を成す村民という役割を与える。どちらかの村民になった子供たちは農業生産に欠かすことのできない水、つまり、灌漑用水の整備をしなければならないというシナリオを提示される。しかし、その整備には多額の費用を要する。そのため、それぞれの村が公正に費用を負担すれば、農作物の収穫量を増やすことができるが、「相手の村だけが費用を支出さえしてくれれば、ただ乗り（フリーライド）すれば良い！」と日常生活の経験だけで気付いてしまうのである。みんなが協力すれば、より良い社会になると気付きながら、自分だけが得をしようとして、周囲と対立を引き起こして、両者が合意できないという状況を体得させる教材になっている。 ２　分析した現代社会の諸課題（社会認識） 身近な地域社会での課題としてどの地方自治体でも起こり得る、ごみ処理施設建設問題を分析した。概要は、徳島市を中心とする市町村が新施設建設候補地を巡って対立し、建設候補地となった佐那河内村では大きな住民反対運動が展開されているものである。全ての市町村が協力できれば、対立は解消して効率的な地方行政が展開できる可能性があるものの、自らの損害を考慮してしまうことで対立が激しさを増している状況になっている現代社会の課題である。 ３　「知のモデル化」がもたらした社会認識形成 授業実践を経た子供たちは、２のような日常生活や地域社会で目にするゴミ処理施設建設問題を、「効率と公正」や「対立と合意」という概念を用いながら考察できると分かった。子供たちの何の気ない日常生活での経験だけで、現代社会の諸課題を考察できるのは、自らの経験だけから得られる「知」をシミュレーション教材で喚起した、本研究で提唱する「知のモデル化」が貢献していると言えよう。これによって、子供たちの社会認識をスムーズに形成することができた。
Ⅳ　考察	本研究の成果は、どのような学習理解度の子供であっても「知のモデル化」によって、現代社会の諸課題を考察できるため、中高一貫教育校はもちろんのこと、中学校社会科、高等学校公民科でも展開可能な授業が開発できたことにある。創意工夫すれば、小学校でも展開を可能とする実践は既に積んである。よって、本研究の意義は、中高一貫教育校だけでなく、東京都において、幅広い校種での活用を可能とする汎用性が構築できたことであろう。 一方、課題は年間を通じたカリキュラム編成ができるように、多方面での教材を開発することにある。しかし、開発した授業以外にも、多数の実践は有することができたため、学校に復帰後、毎日の教育実践の中でブラッシュアップして、課題の克服につなげたい。